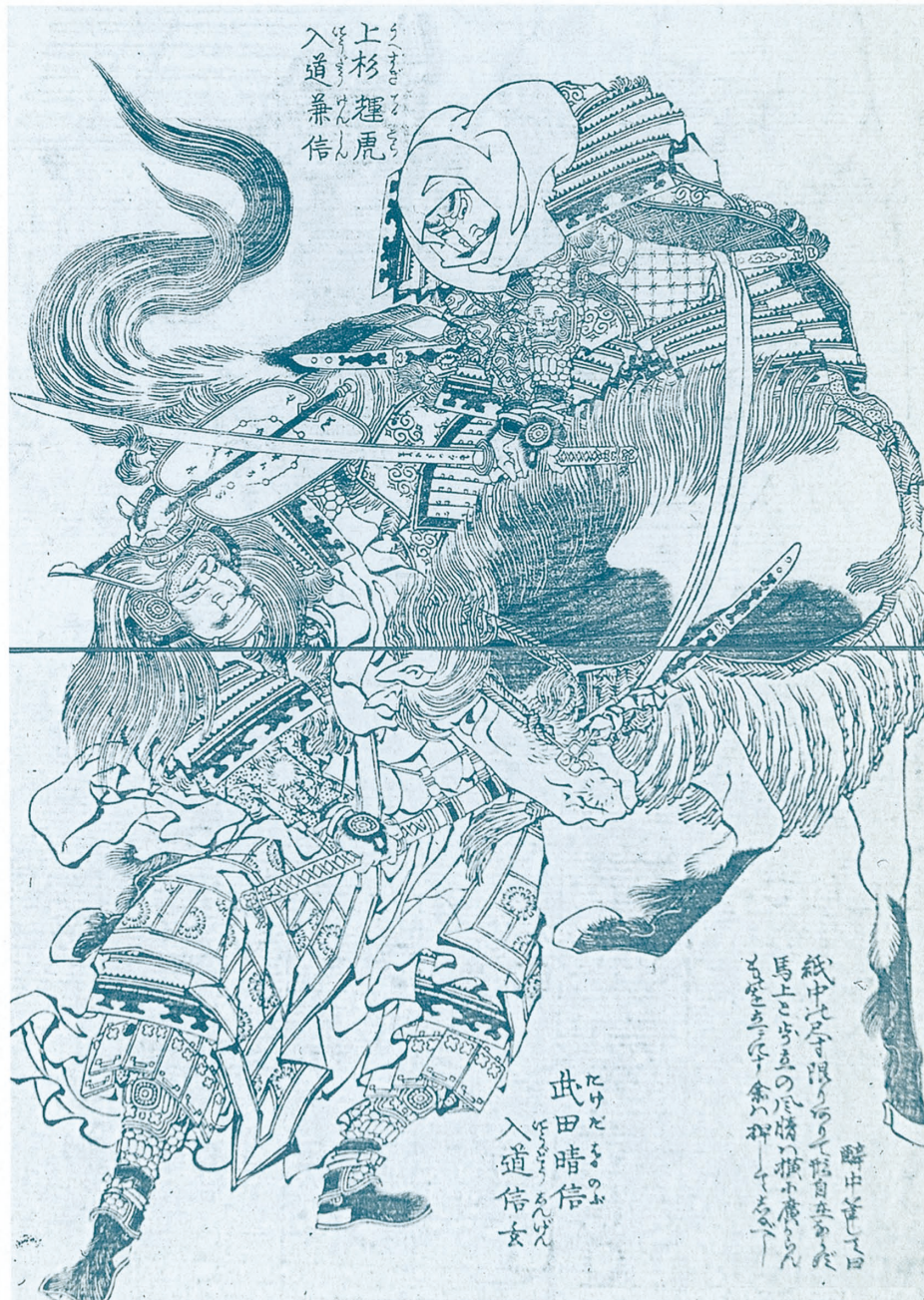


# 六<sup>あ</sup>連<sup>ん</sup>銭<sup>せん</sup>

平成19年3月発行

〒381-1231 長野市松代町松代4-1 (真田宝物館)



『繪本武藏鑑』 葛飾北斎 画 (真田宝物館所蔵)  
(作品解説は裏面)



描かれた川中島の戦い

〔江戸時代における川中島の戦いの広がり〕

今から約四五〇年前に、信州・川中島で武田信玄と上杉謙信が戦った川中島の戦いは、数ある戦国時代の戦いのなかでも最もよく知られる合戦の一つとしてあげられます。

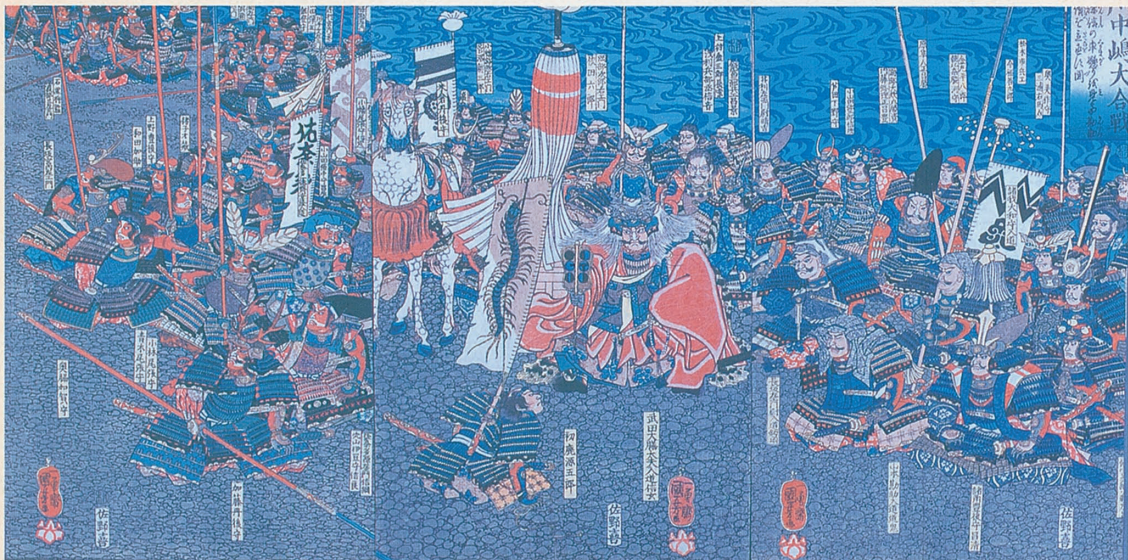


歌川国芳 画 川中島両将直戦図 (個人蔵)



橋本周延 画 歌舞伎役者絵「川中島東都錦絵」一騎打ちの場面 (個人蔵)

川中島の戦いについては、江戸時代の早い時期から、「甲陽軍鑑」をはじめとした軍記物の流布によってその内容が広く知られるようになりました。そして軍記物の記述をもとに、絵草紙とよばれる絵本の挿絵のひとつとして川中島の戦いの様子が描かれるようになり、江戸時代の中期以降には多色摺の木版画・錦絵(にしきえ・浮世絵の一形態)の画題としてさまざまな場面が描かれ、出版されました。また、浄瑠璃や歌舞伎の題材としても取り上げられました。これらの話の内容には、史実とはかけ離れた奇想天外な場面も多くありますが、人々に長く愛され、今もなお上演されるものもあります。こうした歌舞伎の一場面をとらえて、信玄や謙信を演じる歌舞伎役者を描いた役者絵も描かれています。



歌川国芳 画 川中島大合戦図 (個人蔵)



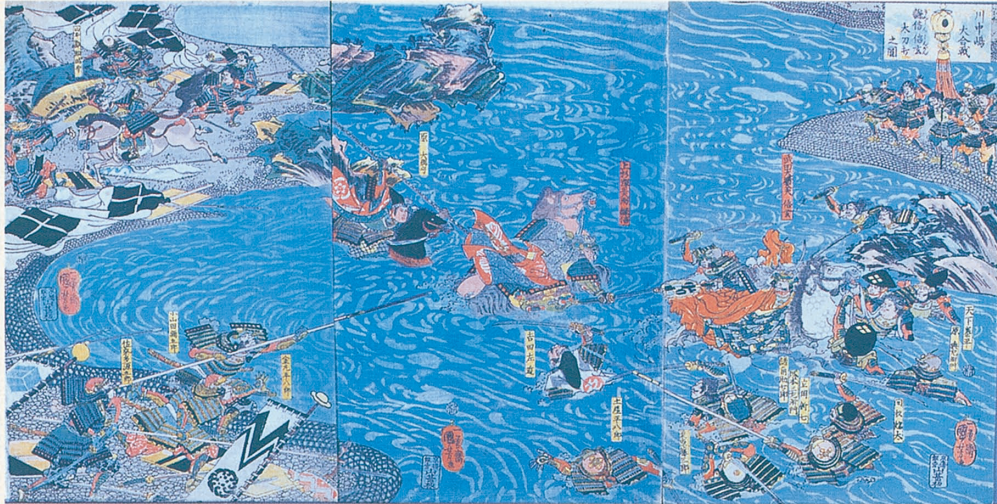
### 川中島の戦いの錦絵

川中島の戦いのように、合戦や武士を描いた錦絵のジャンルを「武者絵」といいます。武者絵の画題として好まれたのは、羅生門の鬼退治、南総里見八犬伝などの物語や、源平合戦などの比較的古い時代を主題にしたものでした。これは江戸幕府が徳川家や幕政の批判につながることをおそれ、天正年間（一五七三〜九二）以降のことについて実在の人物名を出したり、出来事を取り上げたりして書き述べることを禁止していたためです。実際、豊臣秀吉を扱った「絵本太閤記」やその錦絵が発禁処分になり、浮世絵師が処罰される事件も起きました。しかし、川中島の戦いはこの禁に触れないぎりぎりの年代の出来事（武田信玄が亡くなったのは元龜四年＝天正元年）であったため、実際の名前を挙げて描いても、咎められることはありませんでした。川中島の戦いや武田信玄・上杉謙信という武将たちは「江戸時代に最も近い戦国時代の事実」として、より人々に身近な存在として受け止められ、人気があったのではないかと思います。

特に「武者絵の国芳」と呼ばれた浮世絵師・歌川国芳は、多くの川中島の戦いの錦絵を残しています。国芳は、よく知られた信玄・謙信の一騎打ちにとどまらず、様々な場面を臨場感溢れる画面構成で、武士たちの生き生きとした表情を鮮やかな色彩で描いています。国芳は西洋の銅版画を学んだことが知られ、西洋的な甲冑をまとった武者を描いたり、幕末の殺伐とした暗い雰囲気を持つ作品も発表しています。

国芳など浮世絵師の力量もさることながら、川中島の戦いの錦絵が数多く描かれ、人気を博したのは、画題としての面白さもあつたのではないのでしょうか。山々に囲まれた地、千曲川を挟んでの対陣、陸上・水中問わず、多くの武

士が入り乱れての戦い、信玄と謙信という大将同士による一騎打ち、信玄の実弟・典厩信繁や名将と謳われる山本勘助の壮絶な討死……。名場面には事欠きません。国芳以降も、その門弟たちによりさらに多くの錦絵が描かれていることは、その人気の高さを表しているといえるでしょう。



歌川国芳 画 川中島大合戦 謙信信玄太刀打之図 (個人蔵)



歌川国芳 画 信州川中嶋大合戦之図 (海野訓氏蔵)



資料紹介  
『絵本武蔵鑑』

『絵本武蔵鑑』は、挿絵が多く描かれた絵草紙（草双紙とも）の一種で、源義経や弁慶など、様々な武将の図とその解説が見開き一ページに描かれているものです。その中の一つとして、川中島の戦いにおける武田信玄と上杉謙信による一騎打ちの場面が取り上げられています。

天保七年（一八三六）出版で、挿絵は葛飾北斎によるものです。横開きの冊子を縦に使い、画面いっぱい信玄と謙信を描いています。冊子という限られた紙面のため、謙信の乗る馬が不自然に体をよじり、謙信が軍配を持つ信玄に覆いかぶさるような構図になっていますが、睨み合う両者の目線と馬の様子など、迫力が増しているようにも感じられます。墨一色による版本ではありませんが、毛の一本一本まで丁寧に描きこまれ、北斎の絵のすばらしさもさることながら、彫師の技量の高さが伺えるといえるでしょう。

絵草紙に描かれた川中島の戦いの図様は、ほとんどが武田信玄と上杉謙信の一騎打ちのものです。真田宝物館で所蔵している絵草紙のなかにも、川中島の戦いの場面が挿絵になっているものがいくつかあります。『絵本武蔵鑑』と同様、一冊すべてが川中島の戦いのものでなく、いろいろな武者の挿絵のうちの一つとして描かれています。館蔵資料のうちで一騎打ちの場面が描かれている最も古いものは、正徳四年（七一四）大坂で刊行された『絵本古事談』で、大坂で活躍した絵師・橘守国によるものです。

江戸時代、出版業は大坂ではじまり、やがて江戸でもひろく行われるようになりました。絵草紙が江戸で出版されはじめると、その挿絵は、錦絵を手がける浮世絵師たちが描くようになりました。

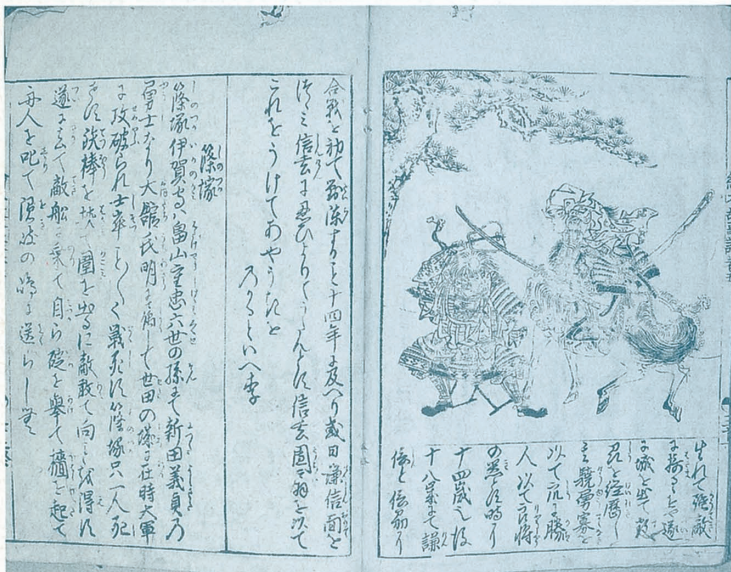
絵草紙や錦絵は、絵草紙屋の店先に並べられ、販売され

ていました。絵草紙屋が出版元を兼ねているところもあり、人気のある画題や絵草紙は、求めに応じてたくさん制作されたとみられます。

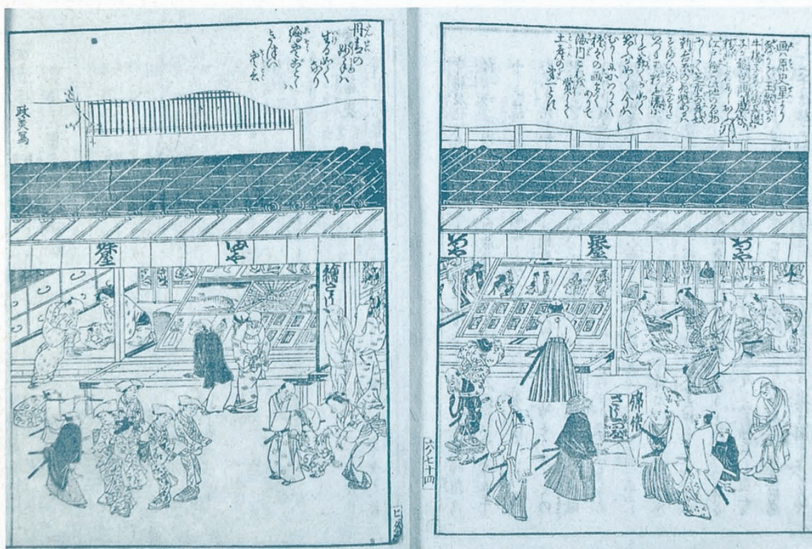
錦絵は、別名「江戸絵」ともよばれ、江戸の名物として江戸の人々に楽しまれたほか、地方への土産品としても好まれました。絵草紙屋は、東海道の起点である日本橋や芝神明、宿屋が多かったという馬喰町など、旅人が多く行き交う町に集中していたようです。

絵草紙や錦絵が広まることで、より多くの人々が「川中島の戦い」を知ることになったのです。

（文責 山中さゆり）



『絵本古事談』 橘 守国 画



『東海道名所図会』 絵草紙屋の様子（寛政九年刊行）

（説明書き抜粋）

江戸絵ハ此地の名物にして芝居歌舞伎新吉原の花魁あるハすまひ取り（相撲取り）の立すかたいづれも彩色濃にして動くが如く笑ふが如く今ハむかしにかハりて種々の画多くありて海内これを賞して土産の第一とす